

第4章 テクスト受容の経験的研究のために

吉田光演

4. 0 〈テキスト受容〉——新しい研究対象？

文学をめぐる研究の固有の領域が文学作品に内在する意味の解釈に求められるべきであるという既成観念は、今ようやく疑問視されつつある。それに代って、文学作品・テキストの〈受容〉の側面が日本における文学研究の場でも徐々に注目されてきている¹⁾。もっとも、一般的には〈受容〉という言葉に含みこまれる概念定義に関しても十分な説明がなく、受容行為をどのようにより包括的なコミュニケーション的理論モデルに組み入れるのかといった基本的な問題にまで議論が徹底されているとはいいがたい。つまり〈受容〉概念が理論的な省察を欠いたまま、新しい研究アспектとして漠然と使用されている感がある。一応このような傾向はあるにせよ、〈受容〉への関心の高まりが示す共通の理解は、ヤウス、イーザーなどが代表する受容美学（ないし作用美学）で強調された「読者がもつ意味構成的な機能」²⁾の重要性の自覚に基づいているとは言えよう。このような視点は、作品を自立的・存在論的に把握してきた従来の文学研究にはほとんど欠落していたものであった。

他方では、文学テキストの研究は、もはや従来の精神科学的伝統にたつ解釈学（Hermeneutik）の方法だけにゆだねられるものではなく、記号論やテキスト言語学などの領域からも（文学を含めた）テキスト分析のアプローチが盛んに行われている事態も見落せない。そこでは記号としての言語が言語使用者との関係で果す諸機能、テキストの結束性（Kohärenz）、意図性などを積極的に引き出す受容者の能力といったものが様々な形で説明され、受容の領域が言語実用論的に解明されようとしている。隣接科学としてのこれらの学問の発展も、文学テキストの受容への関心を呼び起した要因といえることができる。

ところで問題をより現代社会における文学の特性、文学研究の位置に限定し、何故現在、〈受容〉の側面に関心が高まってきているのかを考えると、一般的に次のような理由が考えられる：

- ① （現代芸術の諸傾向も含め）現代文学のテキストには、完結した・自

立的な意味内容が求めにくくなってきており、明快な、一義的な解釈が困難になっている。テキストは、むしろより開かれた、オープンな意味構造を開示するものとして理解され、そこでは個々の受容者がテキストに積極的に働きかけ、自身の意味を構築しうる《Spielraum》(活動空間)が拡大している(別の言葉では「不確定箇所」とか「空所」とも呼ばれる)。

② 文学研究者が比較的確定したものとして考えてきた文学概念・規範が、もはや多くの一般読者のそれとはかけ離れてしまっているかにみえる状況が現出している。読者の読書傾向が最近では非常に多様化し、いわゆる「純文学」の比重が低下し、通俗文学・娯楽文学に入る(その基準は全く曖昧だが!)ような作品が好まれている。とりわけドイツ文学など日本の多くの外国文学研究者達が翻訳などを通じて紹介してきた文学作品が読書に占める位置は低下している。「高い」質の文学の解明を自負する研究者には、このような読者の傾向は一種の「危機」とさえ映るであろう。

③ ②の問題は単に文学内部の出来事にとどまらない。マス・メディアによる様々のテキスト(たとえば広告)の大量伝達、テレビ、映画、漫画などの媒体による社会的コミュニケーションの拡大、様相の変化が、文学の読まれ方にも大きな影響を及ぼしてきている。広告テキストなどでは、実用的な情報伝達の目的以外に、「詩的言語」の機能を利用したようなものが数多く産出され、美的・文学的コミュニケーションの輪郭が不透明になっている³⁾。

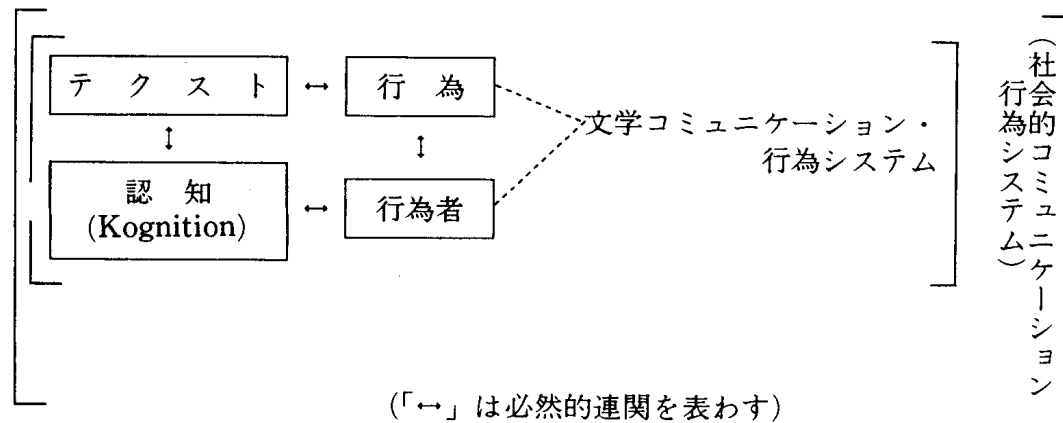
このような現象が現代日本社会における言語的・社会的コミュニケーションを特徴づける根本的問題であるのかどうかは本論の課題ではないが、いずれにしてもこれらは、テキストをどのように読んでいるか、受容するかという受け手の行為と大きく関係していることは首肯しうるだろう。このような問題を注視することによって、文学研究に従事する人々が、これまでのように社会的コンテキストと隔絶された自立的な「言語芸術作品」としての文学テキストの個人的体験を課題としてきた枠組から脱却し、テキストと受容する行為の関係を把握し、より広い社会的コミュニケーションの枠組の中で文学受容を究明しようとすることは、それ自体研究の意義を高めるに違いない。我々はこうした文学研究の重点の移動を注目すべき傾向として評価するが、しかしここで、冒頭に述べた〈受容〉概念の漠然とした使用の問題とあわせて若干の疑念を表明せざるをえない。つまり、②のような意味で、現在の読書傾向を否定的なものにとらえ、そこから〈受容〉を論ずるような態度は果たして正しいかどうかである。今日の受容傾向が、あるべき状態からみて質的

に低下しており、伝達すべき研究者の文学水準が「危機」にさらされると認識するならば、〈受容〉への接近は逆転したものであり、たとえ受容行為が論じられたとしても、それは相変らず受動的な意義しか負荷されないことになりはしないか。いいかえれば、受容の領域を、これまで手続き的に一般化されてきた解釈方法の上に加えられる補完的要素として位置づける限り、受容美学の論者達が陥った解釈学的ジレンマにとらわれざるをえない。つまり、読者の受容過程における意味形成の重要性を洞察しつつも、現実の読者を対象とすることはなく、具体的には予め研究者自身がテキスト内部に意味の〈空所〉を設定し、内包的な読者概念をテキストの中に仮定することによって、受容を（研究者個人によって決定された）テキスト構造の解明と等置してしまう。それは確かに一人の受容者としても活動する研究者の受容結果の言語的テキスト化（＝加工テキスト）ではあるにせよ、いまだ他者の受容過程の対象的な研究とはいえない。同様に、多くの読者の受容を問題にする時に、研究者自身の受容・読み方から導き出された文学的規範を尺度として論ずることはできないはずである。経験的な、コミュニケーション科学的に方向づけられた受容研究の立場にたつならば、まず受容行為を言語的・心理的・美学的な行為プロセスとして明示化しうる理論モデルを構築し、現実に行われる受容過程をそれ自体として記述・説明することによって、間主観的に検証しうる言明を可能にすることが要請される。この観点からすれば、解釈者が抱く文学概念・テキストの意味形成といったものは、その他の読者が抱く文学概念・受容意味と質的には等価であり、いずれも社会的コミュニケーションの体系内での行為の産物である。従って、一方の規範から他者の受容を裁断し、自己の規範を絶対化することを研究の立場にすえることはできない。むしろ、めまぐるしく流動する現代の（文学的）コミュニケーション事象を一步步、かつ動態的に把握し、そこにどのような受容の具体的過程、慣習、評価の差異がみいだされうるかを問題とすべきである。こうした経験的アプローチによってはじめて、前出した現代社会の読書傾向・文化的コミュニケーションの相互関係なども目に見える形で浮きぼりにしうるだろう。

〈受容〉の研究は要するに、従来の研究＝テキスト解釈といった前提を根本的に問い直した時に、新たな意義をもちうるのであり、そのことが又——回り道ではあるがより確実に——研究者個々のテキストの受容の態度にも反省材料を提供するものとなるだろう。

4. 1 受容行為の理論的な輪郭

テキストがそれ自身で意味を内包するといった存在論的・本質論的なテキストの定義とは異なり、経験的な受容研究の前提となるのは、テキストは行為者（たとえば受容者）、彼の行為、認知活動（情緒的なものも含めた心理的なそれ）との関係においてはじめて意味形成の機能を発揮するということである。これらの相互連関を図示すれば次のように表わせる⁴⁾。



実際の受容者（グループ）のテキスト受容を問題にする際には従って、受容行為がなされる先行条件としての受容者の前提条件（社会的な諸条件，言語能力，動機，文学的期待など）を明確にし，更に継起条件として受容行為者の行為—テキスト—認知の関係を相互的に調査・分析する必要がある。

この場合，テキストそのものは通常考え方とは違い，行為者によって言語的対象と確認されうる物理的素材である。Schmidt はこれを厳密にはコミュニカート基盤 (Kommunikatbasis) と定義する。それに対し，受容行為主体が受容過程でこのコミュニカート基盤に働きかけ生み出す認知的構造としての意味構成（上図の活動によって個々の主体の内に生み出される受容の結果）を彼は（受容）コミュニカート (Kommunikat) と定義する。テキストの意味とされるものは従ってコミュニカートのレベルで問題とされるが，これ自体は常に受容者個々人に依存しており，彼の認知活動の過程で生ずるものであるから，直接的に取り出すことはできない。それは，受容結果の言語化（受容プロトコル），受容アンケートへの解答，インタビューなどの加工行為 (Verarbeitung) によって，間接的に観察・把握できるのみである。もちろんコミュニカート基盤としてのテキストには個別言語的なレベルで，音声的・文字的な単位，語彙的な単位，統語論的な特性などが確定されうるが，

ここから直接的にテキストの受容意味を限定することはできない。我々があるテキストから意味をとり出す時、それは単にテキスト内の語の指示的・辞書的な意味を総合したり、統語論的規則を適用して文の意味を把握したりすることにとどまらず、そこから連想的意味や情緒的意味を独自に加え、かつ自己の評価的意味をも付与し、これらの複合体として意味を構成する。つまり、テキスト言語形式が果す意味構成の可能根拠とは別に、受容者自身は同時に彼の言語使用の諸能力、世界に関する知識、推論、情緒的・連想的な意味の具体化（いわゆる内包的意味）などの認知活動を活性化（このことはテキスト言語学においても、文法的な関係レベルを越えた結束性＝Kohärenzなど意味的な結合関係を分析する場合に考慮されねばならない問題である⁵⁾）従って、多くの受容者がひとつのテキストに付与したコミュニカートの意味構造がそれぞれ近似的に一致する場合でも、それはテキスト自体が完全に曖昧性を排除した明確な意味を表示することに基づくのではなく、受容者間の意味形成過程に働く認知的な操作（Operation）が慣習的に一致する結果によるのである⁶⁾。

以上の考察に立脚すれば、文学性とか美的な価値は当然テキストそれ自体の言語的特性に求めることはできない。もちろんテキストの音声的・韻律的特性や語彙の特徴・頻度の統計的分析やテキスト言語学的なカテゴリーによる素材的分析は、コミュニカート基盤の言語的構造の研究としては有意義であろうが、同じテキストでもコミュニケーション状況の相違によって事実に連関によって一義的に機能することもあるれば、又、別の場合には美的に受けとられることもあるのだから、文学性の問題は行為者の側に働く慣習の問題として位置づける必要がある。つまり、事実関連慣習が優位を占めるコミュニケーションの枠組では、テキスト内部に意味論的に多義性を含む言語的要素がたとえあったとしても機能的にはテキストは一義的に受けとられ、単価値として働くが、美的・文学的慣習が優位な場合には原理的にコミュニカートは多価値的に機能する。たとえば一人の受容者が同じテキストに様々な時点で相異なる結束性のある意味を付与してもかまわないし、又、同時に様々な受容者によって別々の意味が加えられ、それぞれが文学的な価値をもつものとして意識されても、文学的コミュニケーションに支障が生ずることにはならない。この多価値性（Polyvalenz）が文学コミュニカート生成のための重要な慣習であることを認めるならば、古典的な文学作品であろうと、現代的な文学作品であろうとおおよそ受容者によって文学的な価値として意識されるコミュニカートには全てこの多価値慣習が作用すると考えるべきであろう。

この多価値性を具体的に例示するために、たとえば次のような具体詩 (Konkrete Poesie) に即して説明してみよう⁷⁾。

wolke

land

haus

land

wind

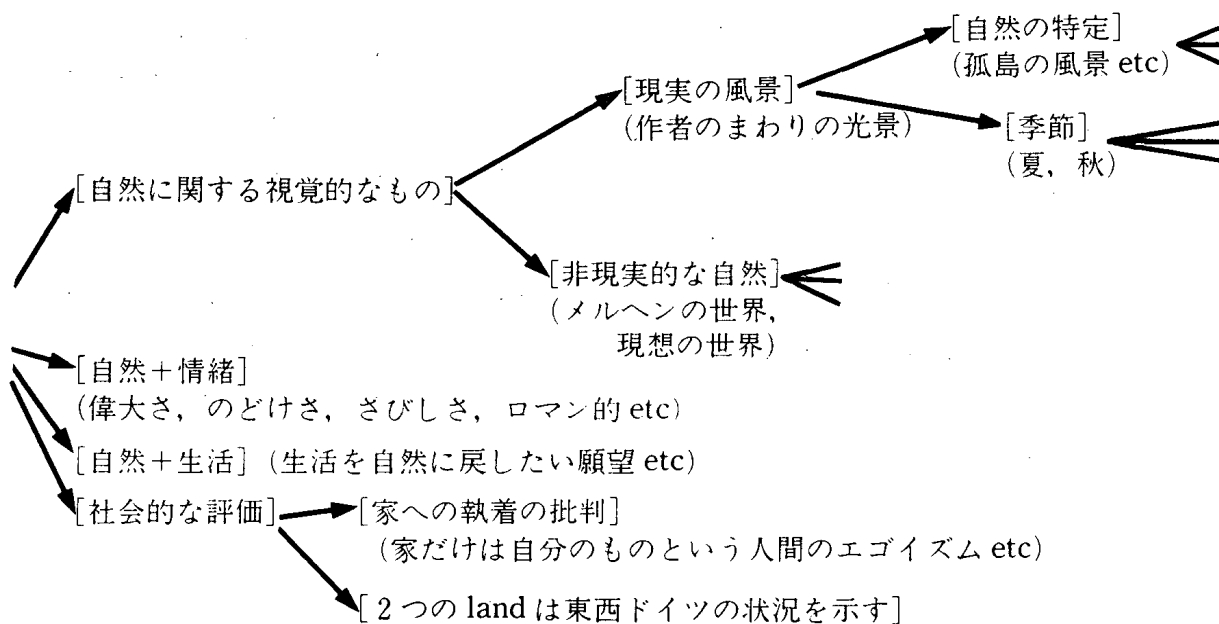
vogel

wind

see

このテキストでは言語的構成要素としては8個の単語が配列されているだけ（語彙素としては6個）であり、それぞれの関係も明示されてはいない。直接的にこのテキストから抽出しうる意味の可能性はそれぞれの語彙の辞書的意味だけである。wolke[雲], land[土地, 陸地, いなか, 国], haus[家], wind [風], vogel [鳥], see [湖, 海] ——というように。さて筆者は、約90名の学生にこのテキストを提示し、語の辞書的意味を理解させ、これが“Konstellation”（星座, 状況）という題をもつ一種の詩であることを説明した上で、学生達がここから何を想起・連想するかを質問した結果、およそ次のようなイメージが得られた。（次ページの図を参照）

これは、学生達がこのテキストに対し表明した受容結果を図式的にまとめたもので、具体的には様々のバリエーションがあった。社会的な評価を下した例は4人にすぎないが、いずれも文字の大きさ(hausだけが特別大きい)、空間的な文字の配置に着目したもので全く理由のない思いつきではない。かなりの数は自然の風景に集中したが、そのとらえ方も図のような差異がある。確認しうることは、言語的にはこれらの意味・連想を指示する要素は何もな



いのであり、それにもかかわらず詩である（＝読み方は自由）ことを指示することによって、それぞれ脈落のある意味構造が生み出され、多次元的な受容コミュニカートが具体的に作り出されたことである。多価値性は、このように極度に言語構成要素間の結合関係が希薄なテキストの受容に限らず、全ての文学的受容過程に機能すると考えるべきであろう。

4. 2 受容者によるテキスト区分の実験

次に紹介する受容の個別的事例研究は、読者がある物語テキストを受容した際に、そのテキストをどのような部分に区分するか、又、この区分の判断基準は何かを分析することを目的としている。従って、受容過程の分析アспектとしては、受容者がテキスト（＝コミュニカート基盤）に付与する情緒的・評価的な意味構成面はここでは一応捨象し、テキストを知覚し、知覚された構成要素に様々の意味規則を適用し、認知的な意味を構成する過程の一部に焦点をあてることになる。

4. 2. 1 問題設定

あるテキストを読んでこれを「幾つかのまとまりに分けよ」といった操作は学校の国語授業でも扱われているし、テキストの一定の階層構造を分析しようとする際にも必要な手続きとなる。又、物語や論文などを要約・圧縮する場合にも、テキストの下位区分を当然念頭に置くだろう。テキスト生産者によって予めこの区分が形式的に指示されている（たとえば段落による区分

や章ごとの区分),そしてこれが受容者の側のテキスト区分とも完全に一致する場合を度外視すれば,テキストそのものに明示されていない相互に結束性のある意味のまとまりを可能にするテキストの下位区分を行いうる受容者の能力は一体何に基づくのであろうか?国語の練習教材でも学習者に度々このようなテキストの区分が要請されるが,その基準が明示的に呈示されることはほとんどないし,又,言語学的な研究においても受容者の言語的・認知的能力としてどのようにテキストの区分が組織されるかに関する十分な説明は提起されていない。この問題に受容の経験的な観察から解答を与えるため筆者は,以下述べるような一連の実験を計画・実施した。

4. 2. 2 仮説設定

受容者によるテキスト区分の複合的操作を完全に説明する研究はほとんど見あたらないが,文と文の結合関係を対象とするテキスト言語学,テキストの要約の認知構造に焦点をあてた心理言語学的研究の諸成果から,経験的に検証可能な幾つかの仮説を導き出すことは可能である:

〈仮説1〉受容者が,テキスト表層上の一定の語,表現形式を特別な区分のメルクマールと認識することによって区分する。例えば接続詞,副詞,名詞の反復使用,時制の転換など“Gliederungssignal”(区分信号)と呼ばれるメルクマールがそれである⁸⁾。

〈仮説2〉個々の文を越えたレベルで,受容者は文の命題を階層的に統合,取捨選択し,いわばマクロ・レベルの意味を記憶の際に構成する。この一種の意味論的な縮約規則は,実際に受容や要約の過程で適用される(van Dijkのマクロ構造モデル)。このモデルを区分操作にも適用している,即ち幾つかの文の意味をひとつのマクロ命題にまとめあげるといった操作によって,グローバルな区分テキストを構成していくと仮定する⁹⁾。

〈仮説3〉意味論的な操作規則とは別に,それぞれのテキスト種類に応じた一定の慣習的なテキストの図式的構造に関する知識を受容者は保持している。例えば民話,物語,論証,エッセイ等々のテキスト種類によって独自の図式が想起される。物語であれば,[枠組(セッティング),出来事(錯綜+解決)]→プロット——といった形式上のスロットが構成される。このようなテキスト種類に関する文化的な知識をそれぞれのテキストにあてはめて区分を行なう¹⁰⁾。

さて,仮説1では,テキスト表層での言語的構成要素の機能に重点が置かれ,仮説2では,認知過程でのグローバルな意味論的構造に重点があり,仮

説3ではテキスト種類の慣習的・形式的な図式構造が問題とされる。

これらの仮説に対し、前提しておかねばならないのは、受容者によるテキスト区分は、テキストそのものの構造から直接に導き出しうるものではなく、彼が自己の持つ言語的・文化的知識に基づいて、かつ特定の受容状況との関係において形成するコミュニカートの構造から派生するということである。一個のテキスト全体とかかわるテキスト区分は高度に複合的な意味的な操作に基づくことが予想されるので、我々は3つの仮説のどれかひとつだけしか決定的な原理として働かないとは考えられない。むしろ3つのレベルが相互に依存しあうような多次元的な操作構造を想定する方がより経験的な観察には有利だと思われる。問題は、それぞれの仮説が検証されうるか、その内のどれがより確率的に優位を占めるか、それぞれの関連性はどうであるのか、又、その他の要因も見い出されうるかを具体的に調査することである。

4. 2. 3 実験プラン

1) まず被験者を2つのグループに分け、グループIにはテキストの題、種類[物語]、作者名、年代などの情報を前もって与え、他方グループIIにはこの情報を与えず本文のみを提示した。IIの受容状況は従って通常の状態とは異なっているが、この条件の差異によって、これらの先行知識の有無がテキスト区分の操作・判断に影響が生ずるか否かを調べることが可能になる。つまり、テキスト種類などの先行情報が与えられると、仮説3のような区分操作がより有効に働くかどうかが問題となる。もちろん題名などの情報は場合によっては意味論的操作レベルで、マクロ構造形成に寄与することも考慮しておかねばならない。

2) 第1の質問は、被験者グループが実際にどのようにテキストを区分するかという問題である。物語テキストには、J. P. Hebel の “Unverhofftes Wiedersehen” の日本語訳 (『思いがけない再会』) を使用した (本章末尾を参照)。この短い物語には形式上の段落分けはない。どの行で区分したかを行番号で示すように被験者に指示し、区分の個所、個数にどのような傾向があるかを量的に計測した。

3) テキスト区分の際に、いかなるメルクマールに被験者が注意を払ったかを、第2の質問とし、アンケート形式で順位をつけるように指示した。区分のメルクマールは、a) 内容・テーマのまとまり、b) 文の中の特徴 (たとえば接続詞) c) 出来事の展開／人物の行動、d) 筋 (プロット) の流れ、e) 読後の漠然とした印象、f) 時間の描写、g) 句読点の打ち方、h) 作

者が言おうとすること、i)場所／状況の描写——の9個である。これらは、文レベルにかかわるもの(b, g), グローバルな意味操作にかかわるもの(a), 物語テキストの種類に特有の特性(d, h: 作者のプロットに対する評価という意味で), テキスト表層上に示される物語テキストの諸特性(c, f, i)を含み、かつ明確に指摘しがたい印象(e)を加えたものである。これらのメルクマールによって最初に掲げた仮説の言明を観察可能な形へと操作化したわけである。この設問によって得られた順位データ(各メルクマールは被験者にとっての重要度に応じて1～9の得点を割りあてられる)を双対尺度法(Dual-Scaling)によって数量化し、テキスト区分のいくつかの判断基準を抽出することがねらいである。

4) 補足的に、テキストを文学的と評価するかどうか、又、好きであるかどうかを質問し、テキストの美的評価がテキスト区分と関係するか否かを調べた。

5) 被験者グループは、福井工専の生徒52人である(実験は、1984年5月22, 29日に実施)。彼らは同年代の高校生とほぼ同様の国語教育を受けているが、集団としては文学的な専門知識を教育されていないグループと考えることができる。年令も、教育過程もほぼ同じである(図1を参照)。

図1

実験図案

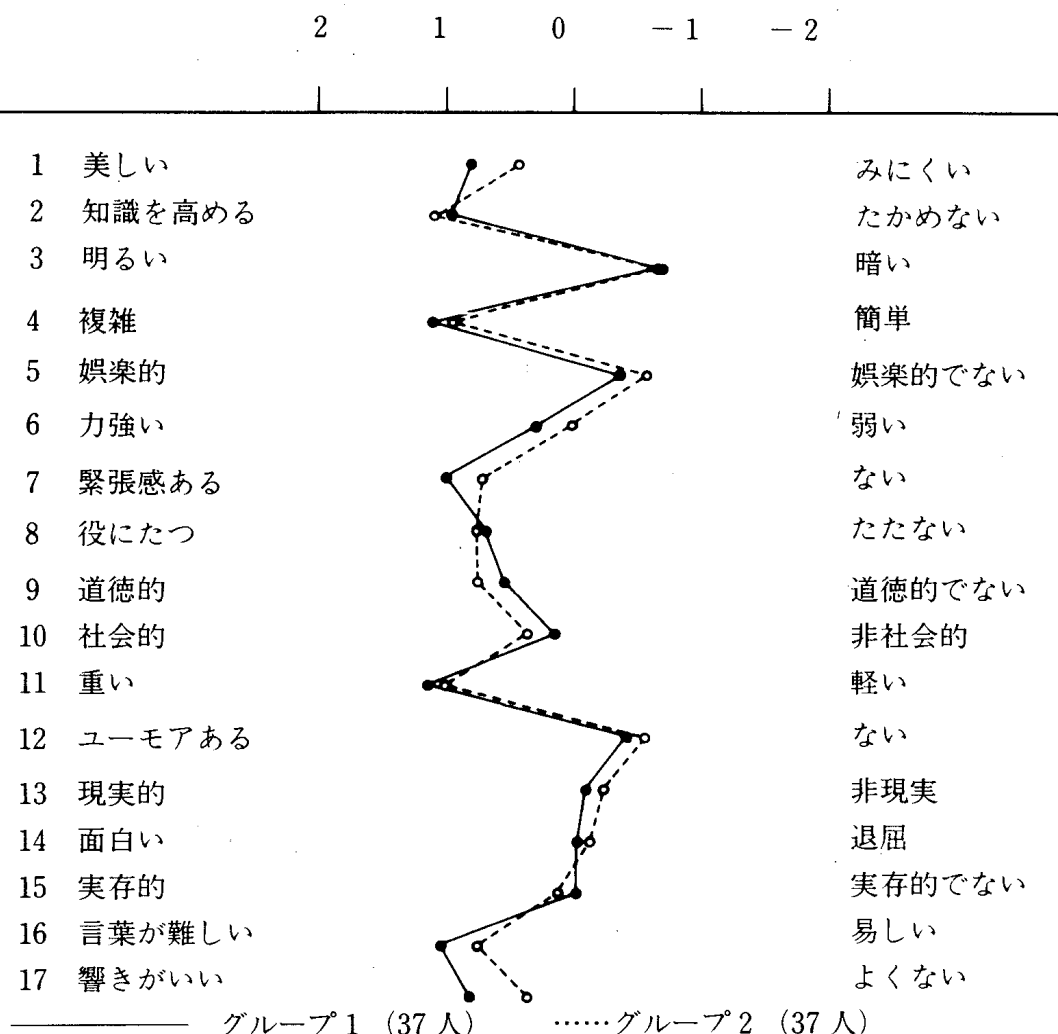
グループ	性別	専 攻	年 齢	人 数
I (先行情報あり)	♂	電気科	17～18	36
II (" なし)	♂	機械科	17～18	16

更に、被験者52人を含む74名の生徒に、一般的な文学イメージを、印象を表わす形容詞の対のリスト上に記すようなアンケートを行い、IとIIグループの平均値を出すと次のような結果を得た(図2)。

集団全体の平均値では個々人の印象の差異はみられないが、全体としての傾向は比較しうる。図2の結果で分るように、どのメルクマールでも2つのグループの間に極端な差はなく、一般的な文学的期待についてほぼ均質であると前提してもよいだろう。つまり、両集団の社会的・文化的な条件、一般的な文学観に顕著な差はなく、受容の前定条件は均等であり、これらの条件によって受容実験のデータが大きく左右されることはないといえる。

図 2

質問：「これは文学だ」という時，一般にどんなイメージをうかべますか？



4. 2. 4 実験結果 1 (テキスト区分の分布)

被験者のテキスト区分の個所に関して，図 3 の結果を得た（区分個所は行番号で示されている）。I，II グループとも被験者全体の 50% 以上が区分個所として挙げたのは，11，23，36，48，69 行めの計 5 個であり，最終行をもうひとつの区分と数えれば合計 6 個の部分テキストが得られる。その他にもまだ様々の区分のバリエーションが提示されたが，数的に有意味でないのでここでは問題としない。

ところで，48 行めの区分個所は，オリジナルのドイツ語テキストを参照すると，“bis die ehemalige Verlobte...zurückkehrte” と，接続詞 “bis” で前の主文に従属する副文であり，文の切れめではない。日本文では，独立した文（「ついに，…かつての許嫁がやってきた」）なので，ここでの区分は翻訳による影響であると考えられる。文としても独立しており，テキストの前

図 3

受容者によるテキスト区分個所の分布

グループ 1				グループ 2			
行	個数	個数÷全体の 人数 (%)	個数÷全体 個数 (%)	行	個数	個数÷全体の 人数 (%)	個数÷全体 個数 (%)
11	19	52.8	11.875	3	1		
14	2			11	9	56.25	10.588
18	7	19.44		14	3		
19	3			18	2		
23	29	80.6	18.125	19	5	31.25	
32	1			23	11	68.75	12.941
36	33	91.7	20.625	28	2		
45	2			36	13	81.25	15.294
48	27	75.0	16.875	45	2		
53	1			48	11	68.75	12.941
60	7	19.44		50	1		
65	4			58	1		
69	23	63.9	14.375	60	5	31.25	
73	1			62	1		
74	1			65	1		
計	160			69	13	81.25	15.294
				73	2		
				74	2		
				計	85		

後で、行為する人物が「抗夫」から「許嫁」に転換していることから、多くの受容者がテキスト区分個所として設定したと予測しうる。

さて、図 3 から I, II 集団の区分を比較すると、次のような傾向が指摘できる。

- ・区分総数は、I では 15 個、II では 18 個と、II の総人数は少ないにもかかわらず区分数はやや増えた。
- ・I の区分の平均は 4.44 個、II では 5.67 個と、II の方が若干多い。
- ・最初に挙げた 50% 以上の被験者がつけた 5 個の個所についてその集中度を計算する。

$$\frac{\text{5 個につけられた区分個数の総和}}{\text{各グループ中の区分個数の総和}} \times 100 (\%)$$

この結果は、I : 81.875%, II : 67.058% となった。両方とも 60% をこえているが、特に I では全体の区分数の 80% 強がこの 5 個所に集中しているのに

対し、IIではその集中度は若干劣り、他の個所への分散がやや大きいことが分った。

以上の区分分布の調査から、次のことが推定しうる：

1) 受容者グループのかかなりの部分は、この物語テキストを6個の部分に区分した。受容によるテキスト区分操作には、一定の共通性があることが計量的にも確認され、テキスト区分操作に何らかの制御的な構造化の要因が働くものと十分に考えることができる。

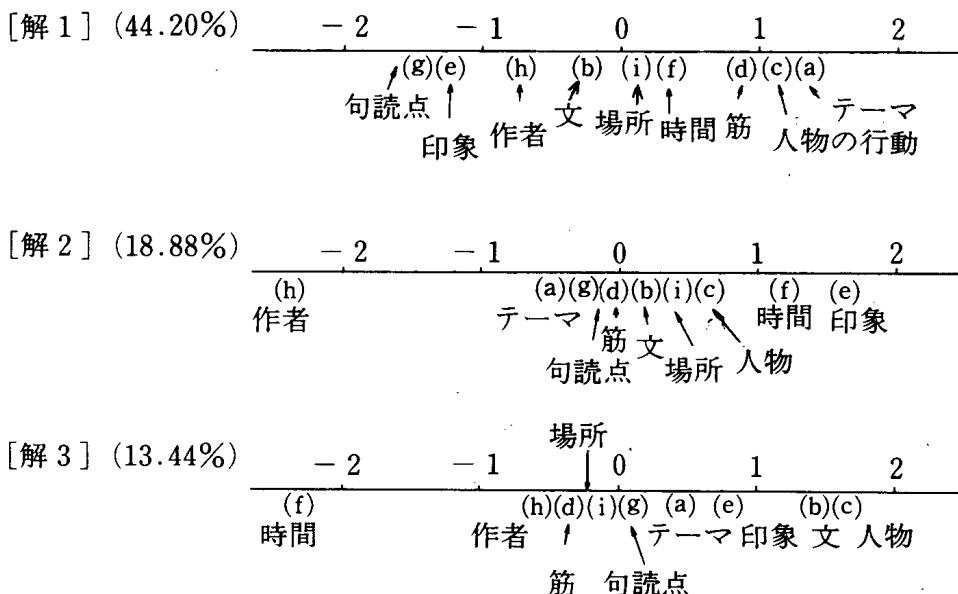
2) テキストに関する先行情報は、受容の際の認知過程で、テキスト区分操作に若干の作用を及ぼしているのではないか。題、種類などの情報を受けたIグループでは、区分操作により共通性が高まるという形でこのことは確認できた。これらの情報は、受容の際の意味形成に一定の方向づけの機能を果たしていることも予測しうるであろう。

4. 2. 5 実験結果2 (区分の判断基準)

次に、区分の判断基準の問題に移る。抽出した順位データは、Dual-Scalingの方法によって数量的データに変形した(この方法に関しては3章を参照)。これは要するに元のデータに潜む被験者の各カテゴリー(ここでは9個のメルクマール)に対する総合的な判断の基準を幾つかの次元に分解できるデータ処理法であるが、計算結果の分析の要点は、ひとつの尺度(各メルクマールの重みづけの配置)で、どのような数的な対立・対極構造がみられるかということである。

[グループIの判断基準] (図4を参照)

図4 区分の次元 (グループ1/36人)

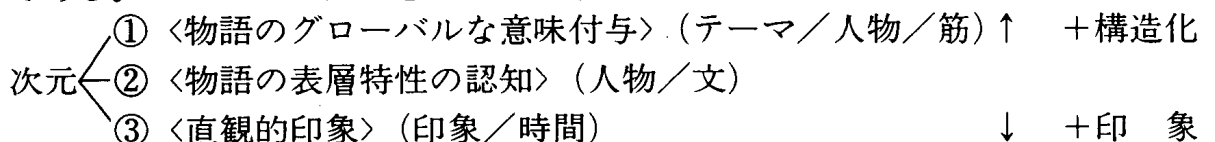


解1の尺度上では、(+)の極に〈テーマ〉、〈人物の行為〉、〈筋〉が近い距離で並び、(-)の極には〈印象〉、〈句続点〉がきている。この重みづけの順序は元のデータの順位に最も近似しており、やはり(+)の値に高い順位が与えられているので、この次元での判断基準は、〈テーマ、人物の行為、筋〉の複合体であるとみてよい。これらは、〈印象〉と対立するので、明確な構造化性として意識されているといえる。又、これらは(-)の側の〈句続点〉や〈文の特徴〉とも対立するので、個々の文のミクロ・レベルを越えたグローバルな意味処理の過程とかかわる。〈人物の行為〉は物語テキストの一特性、〈筋〉は物語のテキスト種類にかかわるものなので、この判断基準は、〈物語テキストのグローバルな意味構成〉の次元と呼ぶことができよう。この次元だけで元のデータの分散の44.20%を説明したことになる。

解2の尺度では、(+)に〈印象〉、〈時間〉が、(-)には〈作者の言明〉が対立しており、その他のメルクマールは0に近いので、これらは判断の弁別化に寄与していない。〈印象〉は、直観的なレベルで形成されうるが、〈作者の言明〉は、テキスト全体の意味を構成し、テキスト種類に基づく図式的構造を作り上げたうえで始めて把握しうるものである。従って〈印象〉が高い重みを占めるこの次元は、構造化性としては弱い。テキストを参照すると、時間の進行は明瞭に、かつ年代順(chronologisch)に表現されており(「50年の余も昔」、23-35行の歴史的事件の継起的配列、「1809年のヨハネ祭」etc)、複雑な認知的過程を経なくても直観的に把握しうると考えてもよいだろう。そうすればこの次元での〈印象〉と〈時間〉の親近性は理解できる。従って、この第2次元を〈直観的印象〉の次元と呼ぶことにしよう。(説明率:18.88%)

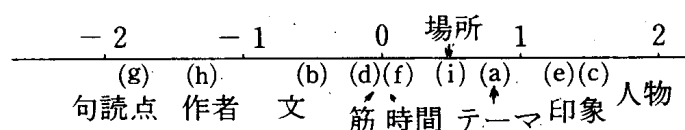
解3の尺度では、(+)に〈人物の行為〉、〈文の特徴〉、(-)に〈時間〉が対立的に表われる。これらのメルクマールはいずれもテキストの表層に具体的に表現されるものである(接続詞や、副詞(句)、行為者を表わす主語などとして)。逆に、テキストの文から推論やマクロ命題の構成、テキスト種類の形式的知識の適用などの複合的意味処理を通じて抽出されると考えられる〈テーマ〉や〈筋〉の重みづけは低く、むしろ〈印象〉の方がそれより高くなっている。これは、〈物語の表層特性の認知〉の次元と呼ぶことができよう(説明率:13.44%)

以上で元のデータの分散の76.52%の説明ができ、判断基準としては十分である。この3つの次元を以下のように図式化してみる。

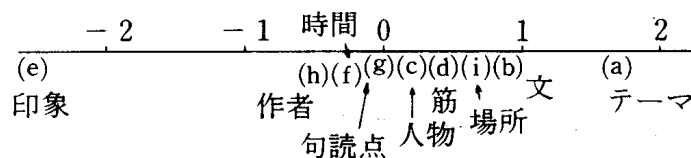


[グループIIの判断基準] (図5を参照)

[解1] (42.71%)



[解2] (15.37%)



[解3] (14.45%)

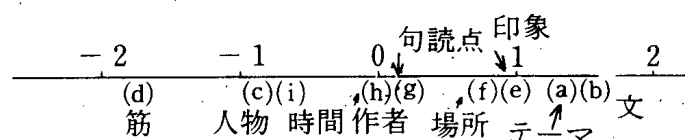


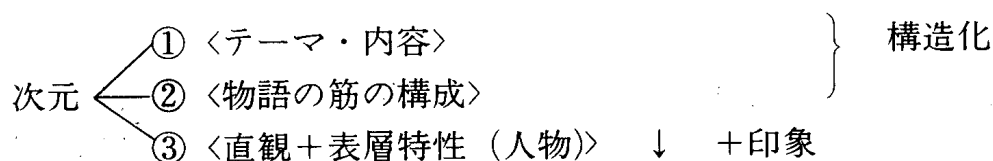
図5 グループ2 (16人) [先行情報なし]

さて、先行情報を与えられなかったグループIIの解1の尺度では、(+)に〈人物の行為〉、〈印象〉が、(-)に〈作者の言明〉、〈句読点〉が対立している。〈筋〉の重みは低く、それに対して〈印象〉はかなり高い。〈印象〉と〈作者の言明〉の対立、〈人物の行為〉の重みの大きさから考えると、グループIの第2、第3次元が若干重なりあっているとも解釈できる。一義的な説明はつけにくいですが、これを一応〈直観+表層特性 (人物の行為)〉の次元と考えることにする (説明率: 42.71%)

解2では、(+)の〈テーマ〉と(-)の〈印象〉が明確に対立している。それ以外のメルクマールの重みはこの両極性から離れ、0に近い位置で集まっているので無視しうる。従って、これを〈テーマ、内容〉の次元と呼ぶ (説明率: 15.37%)

解3では、(+)に〈文の特徴〉、〈テーマ〉が、(-)に〈筋〉の対立が表われている。ただし、ここでは例外的に、被験者に与えられる数値はむしろマイナスの側に集まっているので、(-)面を重視しなければならない。従ってこれを〈物語の筋の構成〉の次元と名づける (説明率 14.45%)。

以上の3次元を下のように図式化する。



グループIの結果と比べると、特徴的にはまず、〈印象〉の占める割合が高いことが指摘できる。第2には、〈テーマ〉への注意と、〈筋〉への関心の傾

向が分離し、第3次元のようにむしろ両者が対立的様相を示すことである。第1のグループではこのような特徴はなく、〈テーマ〉に注意を向ければ、やはり〈筋〉にも注意が喚起されるようになっている。これらは第1の区分分布の結果と考えあわせ、第2グループにおける先行情報の欠如の作用と理解してよいだろう。

4. 2. 6 文学的評価の設問結果 (図6 参照)

テキストへの評価、好みの判断については、図6の結果を得たが、それぞれの項目の3個の解答率の分布を比較すると、両集団の間に極端な差はないと考えてもよいだろう。つまり、ここでは先行知識の有無の影響はそれほど大きくはなく(「文学的と思う」で10%程度のずれはあるが、これも決定的な差ではない)、テキストへの評価的な意味の付与は、テキスト区分の操作それ自身に大きな影響は与えないものと考えてよいのである。

図6 質問3の解答結果

解 答	グループ 1	グループ 2
文学的と思う	16/36 (44.4%)	5/16 (31.25%)
文学的でない	8/36 (22.2%)	4/16 (25%)
どちらでもない	12/36 (33.3%)	7/16 (43.75%)
好きだ	7/36 (19.44%)	2/16 (12.5%)
好きではない	13/36 (36.11%)	4/16 (25%)
どちらでもない	16/36 (44.44%)	10/16 (62.5%)

4. 2. 7 実験結果からの帰結

以上の結果をまとめ返すと次のように結論できよう：

- ①文学テキスト (ここでは Hebel の “Unverhofftes Wiedersehen”) をグローバルな部分テキストに区分する操作は、今回の被験者達の受容実験ではほぼ同様の方法で実行されていることが分った。同じような教育条件、社会的・文化的条件に置かれた受容者のテキスト区分の仕方は、ほぼ均質ではないかということがここから一応推察される (ここでは微小な個人的能力・知識体系の差は一応度外視し、集団としての一般的傾向を問題とした)。
- ②テキスト区分といった操作にも、テキストの表題、種類などの情報はある程度方向づけの機能を果す。この結論を、受容の理論モデルと関係づけると、次のように言えるだろう。即ち、受容者のテキスト受容過程には、彼が経てきた社会化史に基づく前定条件が作用するだけでなく、通常テキストを実際に読む前に一定の受容行為プランを構想する。そのテキストが

どのようなコミュニケーション行為の種類に組み込まれるのか、作者の意図は何かといった事項を受容者は予測する。その場合、テーマを表示する表題、ジャンルやテキスト種類の認識は、テキストが与える情報の性格、そのテキストで受容者は何を行うことができるのかといった方向づけに予め寄与するであろう。こうした受容内容の先取によって認知的な意味形成が構造化されることも、この結果は部分的ではあるが確証している。

③ノーマルな受容条件（つまりグループⅠのそれ）の下では、今回のこのテキストの区分に関して、〈人物の行為〉、〈筋〉、〈テーマ〉への注目が特に大きく関与し、これらは複合的な要因として組み合わされている。これは仮説2と仮説3の有効性を検証したことになる。つまり、テキスト区分には、グローバルな命題的意味の構成と、物語のシェーマに関する知識の適用が重要な要素として作用する。しかも、理論的には両者は分離可能だが、経験的な受容過程では通常の条件では複合体として働くことも分った。更に、テーマ的内容や物語のシェーマ（プロットなど）を抽出する場合、（物語などでは）登場人物の行為の様相・変化が重要な契機となるということもこの結果から推論できる。

④数的な割合としては低いですが、文の特徴もある程度、テキスト区分に寄与する。これに属する構成要素は、仮説1に挙げられた区分信号など、受容の際にテキスト表層部でただちにテキスト部分の切れ目であることを指示する機能を持つ語・句である。実際のテキストでは、“als…aber（しかし、…した時）” “*unterdessen*（そうこうするうちに）” “*plötzlich*（突然）” など時間を示す副詞・接続詞が使用され、そこでいずれも区分が実行されている。つまり、テキストの全体的・階層的な意味構成、テキスト種類の図式の構築による区分とは別に、有意味性は劣り2次的なものだが、テキスト表層部の語句に注意することによって区分するという仮説1も一応裏づけられた。

⑤同様に割合としては低いですが、〈漠然とした印象〉といった要因もテキスト区分に一定関与している。つまり、受容者自身が認知的に把握しえない非構造的な面も全く無視することはできないということである。興味深いことは、このような直観レベルでは、〈時間描写〉への注目が大きな役割を果たしたことである。これは場合によっては、Hegelのこのテキストの受容に特徴的な性格であるといえるかもしれない。比較的短いテキストであるにもかかわらず、時間の進行は克明に、かつ50年の年月の隔たりが一つの部分テキストとしてまとめられるように表現されていることからこのこと

は推測できるでだろう。

ここで出した結論は、さしあたり今回筆者が対象とした受容者グループによる『思いがけない再会』のテキスト区分に関してのみ妥当性をもつみである。この結果をある程度説明原理として一般化するには、異なる受容者グループにおいて抜きとり調査を繰り返して同様の結果が出るかどうかを考察しなければならない。それは今後の課題でもあるが、別の観察で顕著な差異が確認されれば、それが何に基づくか、たとえば受容者の前提条件の相違によるのか、受容過程の意味把握の操作の相違によるのかなどを具体的に検討し、間主観的に説得力が得られるよう説明を修正していけばよいのである。

4. 2. 8 経験的な受容研究の意義

このような実験を表面的に眺めると、経験的な受容研究は、実際に行われているコミュニケーション事象を現象的に観察し、事実を単に数量化して記述することを目的としているといった誤解が生ずるかもしれない。強調しておかなくてはならないことは、数量化といった問題は、間主観的に検証可能な説明を獲得するためのひとつのプロセスにすぎないということであって、主要な手続きはむしろ、どのように明示的・包括的な理論的土台を構築し、そこから一定の理論的命題・仮説を抽出し、これを観察可能なものにまで操作化する・練り直すかといった科学的議論の過程全体にかかわっている。ここでは研究者の主張は、自己の印象・直観に基づくのではなく、間主観的に得られた資料を共通の土台に、自己のよって立つ理論を検証・発展させることに基づくのである。その限りで研究者間の議論は透明なものになり、自由に（権威を必要とすることなく）行われるはずである。

しかもその研究は自己目的と化してはならない。経験的な受容研究は、具体的に規範主義的な文学教育を改善するために役だつ。文学教育、あるいは文学テキストを用いた国語（外国語）教育では、しばしば教える側のテキストの読み方が、一方的に学習者に伝達されることが多い。又、何故テキストをそのように理解するのかに関しても合理的な説明が不足したりする。経験的研究によってテキスト理解過程・受容過程がより具体的に解明されれば、文学授業は規範的概念や説明の流布に終ることなく、学習者に自らのテキスト理解の構造について議論の契機を与えるような資料を提供する。とができよう。

他方では、異文化間、異なる層の間の受容の比較などについても、経験的受容研究は今後実り多い成果を挙げることができるし、又そうでなければならぬ。テキスト言語学や記号論の領域でも、既に一定のテキスト構造の解明が盛んに行われているが、それらは一般的な説明に終ることが多く、文化的・社会的に規定された個々の受容者の問題にまで踏みこんでいない。従って、たとえ構造にかかわるカテゴリーが明示的であっても、異なる文化、異なる社会の下でテキストを理解する者にとってそれがただちに有効であるかどうかは明らかではない。受容過程の比較研究は、こうした問題に踏みこみうる方法である。たとえばここで紹介したテキスト区分の操作の仕方に日独間で相違があるか否かといった問題も明確な受容観察の結果で調査することが可能となる。こうした比較研究は、テキストをめぐるコミュニケーション上のずれ・ギャップを理性的に発見し、改善するためのひとつの有効な手段となりうるであろう。

テキストの受容、とりわけ文学的コミュニケーション行為として行われる受容行為という直接的に見えない複雑な言語的・認知的・心理的過程を経験的に可視できるように把握する試みは、もちろんそう容易に達成することはできないだろう。実験・観察といった手続きも、人間の内面やコミュニケーション・相互行為に関係する事象に適用する場合は倫理的な観点からみても特に慎重さを要する。それが正当化されるのは、ひとえにその研究の社会的重要性が広範に呈示される場合であろう。この意味で経験的な文学コミュニケーションの研究にたずさわる者は、啓蒙の精神を常に忘れてはならない。

注（４章）

- 1) 今回の日本独文学会秋季研究発表会(1984)でも、我々のシンポジウム以外に、『1968年以降の西ドイツの文学と社会』シンポジウムの中で、ヤウスの受容理論、文学産業の問題、日本の学生によるドイツ文学受容の問題などが扱われ、「受容」という言葉が度々用いられていた。このことにも〈受容〉の側面への関心の高まりは示されているだろう。
- 2) W. Iser. 1976, S. 39.
- 3) ここに挙げた②③の問題は、我々のシンポジウムや、『68年以降の西ドイツの文学と社会』シンポジウムで若干議論になったことがらである。
- 4) S. J. Schmidt (1982) S. 17 参照。
- 5) Beaugrande/Dressler (1981) S. 7 参照。
- 6) S. J. Schmidt (1982) S. 19f. 参照。

- 7) Eugen Gomringer : Konstellation. In : Konkrete Poesie deutschsprachiger Autoren. S. 20/21.
- 8) Gülich/Raible (1977) S. 42—46参照。
- 9) van Dijk (1980) S. 41—67 参照。彼はこの意味論的構造を〈マクロ構造〉と定式化し、実際に被験者によるテキスト要約結果にてらしてこの構造を検証しようとしている。この意味で彼の研究は経験的な言語心理学的な領域をもカバーするものである。
- 10) たとえば, Propp, Todorovなどは、民話、童話の分析を通じていわば物語の文法構造を抽出しようとした。注8と同書 S. 192—272 を参照。なお van Dijk は、意味論的なレベルのマクロ構造とは別に、テキスト種類に特有の慣習的な図式構造を〈スーパー構造〉として定式化した。van Dijk (1980) S. 128—152 参照。

文 献 (4 章)

○使用テキスト

- Eugen Gomringer : Konstellation. In : Konkrete Poesie deutschsprachiger Autoren S. 20/21. 1969. München. Goethe Institut.
- J. P. Hebel : Unverhofftes Wiedersehen. 邦題『思いがけない再会』(川村二郎訳)。『ドイツ短篇 24』 p.8—9. 1971年. 集英社。

○研究書

- Beaugrande, R./Dressler, W. 1981. Einführung in die Textlinguistik. Tübingen. Niemeyer.
- van Dijk, T. A. 1980. Textwissenschaft. Tübingen. Niemeyer.
- Groeben, N. 1982. Methodologischer Aufriss der Empirischen Literaturwissenschaft. In : SPIEL. Jg. 1. Heft 1. S. 26—89.
- Iser, W. 1976. Der Akt des Lesens. München. UTB.
- Schmidt, S. J. 1980. Grundriss der Empirischen Literaturwissenschaft. Bd I. Wiesbaden. Vieweg.
- Schmidt, S. J. 1982. Die Empirische Literaturwissenschaft ELW : Ein neues Paradigma. In : SPIEL. Jg. 1. Heft 1. S. 5—25.
- Viehoff, R. 1983. Rezeption und Verarbeitung. Anmerkungen zu methodischen Fragen einer empirischen Literaturwissenschaft. In : SPIEL. Jg. 2. Heft 1.
- SPIEL : Siegener Periodicum zur Internationalen Empirischen Literaturwissenschaft. Hrsg. von S. J. Schmidt und R. Viehoff. Frankfurt. Peter Lang.
- E.Gülich/W.Raible. 1977. Linguistische Textmodelle. München. Fink.
- 吉田光演 (1984) 『受容行為と加工行為——言語的・文学的コミュニケーションの経験的研究の可能性』 金沢大学文学部独文研究室報 第2号. pp. 45—64.

[資料 1]

Text : Johann Peter Hebel (1760~1828) : Unverhofftes Wiedersehen.
Aus "Kalendergeschichten"*Unverhofftes Wiedersehen*

In Falun in Schweden küßte vor guten fünfzig Jahren und mehr ein junger Bergmann seine junge, hübsche Braut und sagte zu ihr: »Auf Sankt Luciä wird unsere Liebe von des Priesters Hand gesegnet. Dann sind wir Mann und Weib und bauen uns ein eigenes Nestlein.« — »Und Friede und Liebe soll darin wohnen«, sagte die schöne Braut mit holdem Lächeln, »denn du bist mein einziges und alles, und ohne dich möchte ich lieber im Grab sein als an einem andern Ort.« Als sie aber vor Sankt Luciä der Pfarrer zum zweiten Male in der Kirche ausgerufen hatte: »So nun jemand Hindernis wüßte anzuzeigen, warum diese Personen nicht möchten ehelich zusammenkommen«, da meldete sich der Tod. Denn als der Jüngling den andern Morgen in seiner schwarzen Bergmannskleidung an ihrem Haus vorbeiging, der Bergmann hat sein Totenkleid immer an, da klopfte er zwar noch einmal an ihrem Fenster und sagte ihr guten Morgen, aber keinen guten Abend mehr. Er kam nimmer aus dem Bergwerk zurück, und sie saumte vergeblich selbigen Morgen ein schwarzes Halstuch mit rotem Rand für ihn zum Hochzeitstag, sondern als er nimmer kam, legte sie es weg und weinte um ihn und vergaß ihn nie. / Unterdessen wurde die Stadt Lissabon in Portugal durch ein Erdbeben zerstört, und der Siebenjährige Krieg ging vorüber, und Kaiser Franz der Erste starb, und der Jesuitenorden wurde aufgehoben und Polen geteilt, und die Kaiserin Maria Theresia starb, und der Struensee wurde hingerichtet, Amerika wurde frei, und die vereinigte französische und spanische Macht konnte Gibraltar nicht erobern. Die Türken schlossen den General Stein in der Vetranner Höhle in Ungarn ein, und der Kaiser Joseph starb auch. Der König Gustav von Schweden eroberte Russisch-Finnland, und die Französische Revolution und der lange Krieg fing an, und der Kaiser Leopold der Zweite ging auch ins Grab. Napoleon eroberte Preußen, und die Engländer bombardierten Kopenhagen, und die Ackerleute säeten und schnitten. Der Müller mahlte, und die Schmiede hämmerten, und die Bergleute gruben nach den Metalladern in ihrer unterirdischen Werkstatt. / Als aber die Bergleute in Falun im Jahr 1809 etwas vor oder nach Johannis zwischen zwei Schächten eine Öffnung durchgraben wollten, gute dreihundert Ellen tief unter dem Boden, gruben sie aus dem Schutt und Vitriolwasser den Leichnam eines Jünglings heraus, der ganz mit Eisenvitriol durchdrungen, sonst aber unverwest und unverändert war, also daß man seine Gesichtszüge und sein Alter noch völlig erkennen konnte, als wenn er erst vor einer Stunde gestorben oder ein wenig eingeschlafen wäre an der Arbeit. Als man ihn

aber zu Tag ausgefördert hatte, Vater und Mutter, Gefreundte und Bekannte waren schon lange tot, kein Mensch wollte den schlafenden Jüngling kennen oder etwas von seinem Unglück wissen, / bis die ehemalige Verlobte des Bergmanns kam, der eines Tages auf die Schicht gegangen war und nimmer zurückkehrte. Grau und zusammengeschrumpft kam sie an einer Krücke an den Platz und erkannte ihren Bräutigam; und mehr mit freudigem Entzücken als mit Schmerz sank sie auf die geliebte Leiche nieder, und erst als sie sich von einer langen heftigen Bewegung des Gemüts erholt hatte, »es ist mein Verlobter«, sagte sie endlich, »um den ich fünfzig Jahre lang getrauert hatte und den mich Gott noch einmal sehen läßt vor meinem Ende. Acht Tage vor der Hochzeit ist er auf die Grube gegangen und nimmer gekommen.« Da wurden die Gemüter aller Umstehenden von Wehmut und Tränen ergriffen, als sie sahen die ehemalige Braut jetzt in der Gestalt des hingewekkten kraftlosen Alters und den Bräutigam noch in seiner jugendlichen Schöne, und wie in ihrer Brust nach fünfzig Jahren die Flamme der jugendlichen Liebe noch einmal erwachte; aber er öffnete den Mund nimmer zum Lächeln oder die Augen zum Wiedererkennen; und wie sie ihn endlich von den Bergleuten in ihr Stübchen tragen ließ, als die einzige, die ihm angehöre und ein Recht an ihn habe, bis sein Grab gerüstet sei auf dem Kirchhof. / Den andern Tag, als das Grab gerüstet war auf dem Kirchhof und ihn die Bergleute holten, schloß sie ein Kästlein auf, legte ihm das schwarzseidene Halstuch mit roten Streifen um und begleitete ihn in ihrem Sonntagsgewand, als wenn es ihr Hochzeitstag und nicht der Tag seiner Beerdigung wäre. Denn als man ihn auf dem Kirchhof ins Grab legte, sagte sie: »Schlafe nun wohl, noch einen Tag oder zehn im kühlen Hochzeitbett, und laß dir die Zeit nicht lang werden. Ich habe nur noch wenig zu tun und komme bald, und bald wirds wieder Tag. Was die Erde einmal wiedergegeben hat, wird sie zum zweiten Male auch nicht behalten«, sagte sie, als sie fortging und noch einmal umschaute.

[資料 2]

使用テキスト (川村二郎氏の翻訳による)

J.P.ヘーベル『思いがけない再会』

思いがけぬ再会

スウェーデンのファルンで、今から五十年の余も昔のことだが、ある若い坑夫が、若く美しい許嫁に接吻し、こう語りかけた。「聖ルチアの日になれば、わたしたちの愛には、牧師様の手から祝福が授けられる。そうすればわたしたちは晴れて夫婦なのだ、自分たちだけの小さな家を作ることができるのだ。」——そしてその家の中に、平和と愛を住まわせましよう」と、美しい許嫁は、やさしい微笑を浮かべていった。「なぜならあなたは、わたしにとってただ一人の人、わたしのすべてなのでもう。あなたがいらっしやならなければ、僕かどの場所に住むより、お墓にはいった方がいくらいなのでもう。」だが、聖ルチアの日の前に、牧師が教会で、彼らの二度目の披露をおこない、「両名の婚姻に異議を申し立てたい者があれば」といった時、死神がその申し立てをした。というのも、その翌朝、若者が黒い坑夫の服を着て——坑夫はいつも死装束を身につけているものであるが——許嫁の家のそばを通りかかった時、彼は今一度、彼女の部屋の前を覗き、おはようといはしたものの、そのあと、今晩はをいうことはもうなかったのだから。彼は二度と鉱山から戻ってこなかった。その同じ朝、許嫁は彼のために、黒いスカーフに赤い縁飾りをつけていたのだが、それらなんの甲斐もないことで、彼は二度と戻ってこないとわかった時、彼女はスカーフをかわらけに置き、嘆き悲しみ、片時も彼のことを忘れはしなかった。そのあいだに、ポルトガルのリスボン市が地震によって破壊され、七年戦争が過ぎ去り、皇帝フランソワ一世が歿し、イエズス会が解散され、ポーランドが分割され、女帝マリア・テレジアが歿し、スドラーエンセが処刑され、アメリカが独立し、フランス、スペインの連合軍は、ジブラルタルを占領することができなかった。トルコ人はハンガリーのヴェネランの洞窟に、シュタイン將軍を幽閉し、皇帝ヨーゼフもまた歿した。スウェーデンのグスタフ国王がロシア領フィンランドを征服し、フランス革命と長い戦争がはじまり、皇帝レオポルト二世もまた墓に入った。ナポレオンがロシアを征服し、イギリス人がコペンハーゲンを砲撃し、そして、農夫は種を播き、刈り入れた。粉屋は粉を碾き、鍛冶屋は鋸を振るい、坑夫は地下の仕事場で鉱脈を探して掘り進んだ。さてしかし、一八〇九年のヨハネ祭の頃、ファルンの坑夫たちが、地下三百エレという深みで、二本の縦坑のあいだに穴を掘り抜こうとした時、砕石と緑礫水の中から、一人の若者の死体が掘りだされた。死体にはすっかり緑

髪が伸び通っていたが、そのことを別にすれば、腐敗や変色の跡はどこにも見られず、顔だちも年の頃は、はっきり見ただめることができた。その有様はさながら、ほんの一時前前に息を引き取ったのではないかと、それとも、仕事の途中でとろとろと眠りこんだのではないかと、と思われるばかりであった。しかし死体が地上に運びだされた時、父も母も、親族も知人もとうに死に絶えていて、このまどろむ若者が誰であるのか、いかなる不幸が彼を襲ったのか、知っているといる者は一人としていなかった。ついに、ある日作業についたまま二度と戻ってこなかった、あの坑夫のかつての許嫁がやってきた。髪は白く、皺ばみ老いがまわって、杖にすがりながらその場へたどり着くなり、彼女はすぐさま花婿をそれと見分けた。心の痛みよりむしろ、有頂天な歓喜のあまりに、彼女は恋人の死体の上に崩れおれた。はげしい心の昂奮もいつとき経ってようやく鎮まると、「これはわたしの婚約者です」と彼女はいった。「この人のためにわたしは五十年喪に服してきました。お恵み深い神様が、わたしに死ね前にも、もう一度この人に合わせてくださったのです。婚礼の一週間前にこの人は山へ出かけたまま二度と帰ってこなかったのです。」その場に居合わせた人々の心は悲しみにひたされ、誰も涙をとどめることができなかった。その昔の花嫁が今は洞れはて見られぬか、もくもくとした老妻に姿を変えているのに、花婿は、まだ青春の美しさに包まれているのである。五十年を経て、花嫁の胸には今一度青春の愛の焰が燃えあがったのだが、花婿はまた口を開いて微笑を見せることもなければ、目をあけて再会を喜ぶこともない。死人とゆかりのあるのはこの人だけなのだから、死人をわがものと呼ぶ資格のある、ただ一人の人の人なのだから、という次第で、教会墓地に墓の用意が整うまで、この死体は、坑夫たちの手によって老妻の部屋に運びこまれていた。あくる日、教会墓地に墓の用意が整い、坑夫たちが死体を引き取りにきた時、彼女は小箱の蓋を開けると、赤い縁飾りのついた黒絹のスカーフを死体の首に巻きつけ、まるで今日が婚礼の日であって埋葬の日ではないかのように、一縷の晴着を身にまとい、死体のあとにつづいた。教会墓地の墓穴に死体がおろされた時、彼女はいった。「ではもう一日か十日ほど、涼しい新床で眠っていてくださいな。ね。そのあいだ、退屈しないでね。わたしはまだほんの少し、することがあるの、それがすめばすぐ参ります。そのうち夜も明けるでしょう。大地が一度返してよしたものを、もう一度、手もとにためておくことは、できないはずよ。」立ち去りぎわに、今一度振り返りながら、彼女はこういふのであった。

8180 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40